

が正常な高さにならないことも30%ある。したがって、この形質は、ヒロバスゲに限られたものではないとみななければならない。アオヒエスゲでも、吉川(1960)がふれているように、ごくまれにそうした例がある。果胞の嘴は、アオバスゲもアオヒエスゲも細長く、口部の歯は明らかである。

ヒロバスゲ、アオバスゲともに、叢生して走出枝を欠か目立たないといわれている。四国のアオバスゲも多くはそのようであるが、きわめてまれに短い走出枝の出ることがある。アオヒエスゲは、根茎が短いときにすこし大きくなってはうが、めだつた走出枝を見ることはあまりない。

以上のように、ヒロバスゲとアオバスゲとは、花序の性質が共通し、またアオバスゲとアオヒエスゲの走出枝による違いも明らかでないことがわかった。これらは、外形ではやはり葉の広狭で区別すべきものと思う。

分布 ヒロバスゲは、南千島、北海道から本州の近畿地方北部と隠岐までたしかな生育地が知られ、分布は日本海側に偏っている。アオバスゲは、本州では北は東北地方まで、西は中国山地にもあり、四国山地と九州にも分布し、日本海要素とみなされるヒロバスゲのような分布型とは異なっている。アオヒエスゲは、千葉県から東海、近畿、四国、九州のおもに太平洋側に生じ、中国、四国地方の瀬戸内側では山地はもちろん低地でも、記録は不確かである。この事実は、アオヒ

エスゲはヒロバスゲに対応する襲速紀型の分布をしていると考えられる。なお、アオバスゲは、四国ではほとんどが海拔1,000 m以上の山地の冷温帯に生ずる。それにたいして、アオヒエスゲは、500 m内外以下の暖温帯に見られ、超塩基性岩地帯にめだつて多く、この傾向は本州でも杉本(1984)が指摘している。

スゲ属植物のうち、同一種で分布の主領域が太平洋側と日本海側に分かれる例として、カンスゲとホソバカンスゲがあり、日本海側のものの葉が狭い。しかし、ヒロバスゲは、堀田(1974)が説明しているような、日本海側に広葉の草本が見られる例の一つとしてあげられることもできる。

引用文献

- 堀田 満 1974. 植物の分布と分化. pp. 283-287. 三省堂, 東京.
- 小山鐵夫 1964. かやつりぐさ科. 北村四郎, 村田源, 小山鐵夫. 原色日本植物図鑑草本編III: 210-301. 保育社, 大阪.
- 大井次三郎 1953. 日本植物誌. p. 200. 至文堂, 東京.
- 1982. カヤツリグサ科. 佐竹義輔ほか編. 日本の野生植物. 草本I: 145-185. 平凡社, 東京.
- 杉本順一 1984. 静岡県植物誌. p. 710. 第一法規出版, 東京.
- 吉川純幹 1957, 1960. 日本スゲ属植物図譜1: 132-135, 3: 360-361. 北陸の植物の会, 金沢.

(高知市 [redacted])

リュウキュウタラノキについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Aralia elata* (Miq.) Seem. var. *ryukyuensis* J. Wen.

先に琉球のタラノキ属の1種は台湾に分布するウラジロタラノキ *Aralia bipinnata* Blanco と同じものであると報告した(本誌 62: 189, 1987)。しかし、琉球のものは小花梗が短く、小葉の鋸歯の切り込みが浅い点で異なっていたが、一か所で4個体の花しか見ていなかったため、個体変異なのかどうかわからなかった。沖縄の沢岬安喜氏から沖縄の各地の標本を送ってもらったところ、沖縄のものはフィリピン、台湾のものと異なること

が明らかになった。小花梗は花の時で長さ1-1.5 mm, 果時で1.5-2 mm であって (Fig. 1, a), 小集散花序の花は密に集まっている。*A. bipinnata* の小花梗は花の時3-5 mm, 果時に4-7 mm あって、花や果実がまばらについている (Fig. 1, b)。琉球のものは葉柄に殆ど刺がなく、刺のある場合には下記のように短くて太い。小葉は浅い尖った鋸歯を持つが、*A. bipinnata* は葉柄に短く細い刺があり、小葉の鋸歯は荒く明瞭で、先は刺

状に尖っている。葉の鋸齒の形は変異があり、*A. bipinnata* の葉柄には刺の無いものもあるけれど、小花梗の長さは明瞭に異なる。別の種類と考えられる。*A. bipinnata* の分布は台湾までである。

琉球のものは台湾で *A. decaisneana* Hance としているものにより近縁である（台湾の *A. decaisneana* とされているものは、中国大陸のものとは別のものと思うが、それは別の機会に述べる）。葉の形、花序の形など、琉球のものは台湾の *A. decaisneana* と殆ど同じである。ただ後者は茎や葉に鋭い刺を持つことや、枝や葉柄に開出する褐色の毛が密生し、葉の両面に硬い毛が生えて

いるので、同じ種類とはならない。琉球のものは現在のところ八重山列島からは知られていないが、台湾北西部の山地にも出てくる（太平山、ピヤナン）ので琉球の固有種というわけではない。初島氏は琉球のものをタラノキの品種とし、ウラジロメダラ *A. elata* (Miq.) Seem. f. *hypoglauca* Hatusima, nom. tant. の名を与えているけれど（北琉球の植物：121, 1991）、台湾のウラジロタラノキと混同しやすいし、琉球を主とする種類なので、リュウキュウタラノキとしたほうが分かりやすい。

琉球のものが *A. bipinnata* と異なることは1994

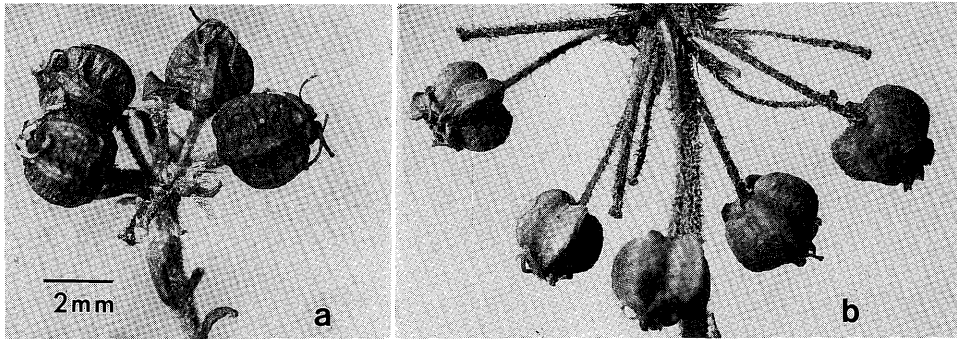


Fig. 1. Umbellets with fruits. a. *Aralia ryukyuensis*. b. *A. bipinnata*. a. Okinawa Isl., Kunigami (T. Yamazaki 6461, Oct. 1990). b. Philippine, Baguio (Elmer 6293, Feb. 1905).

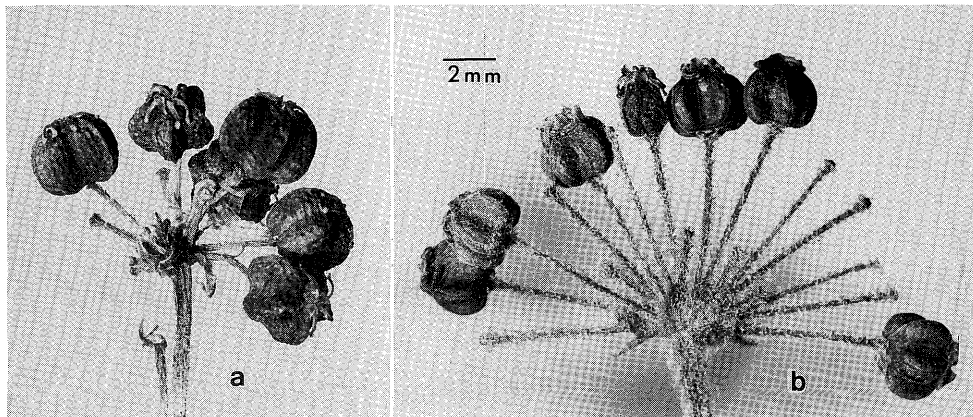


Fig. 2. Umbellets with fruits. a. *Aralia ryukyuensis* var. *inermis*. b. *A. elata*. a. Izu-shichito, Isl. Miyake (S. Mura, Oct. 1993). b. Hokkaido, Tokachi (G. Koizumi, Aug. 1916).

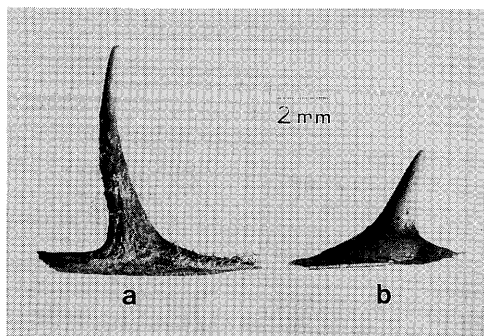


Fig. 3. Spines on branches. a. *Aralia elata*. b. *A. ryukyuensis*. a. Pref. Nagano, Nakabusa-Ariake (S. Momose, 1933). b. Okinawa Isl. Kunigami (T. Yamazaki 6461).

年に J. Wen 氏がすでに報告している。その見解に賛成であるが、Wen 氏はこれをタラノキ *A. elata* (Miq.) Seem. の変種として記述した。しかしリュウキュウタラノキはタラノキと明瞭な違いがある。リュウキュウタラノキでは茎の刺が短くて太い (Fig. 3, b)。小葉は基部近くの幅が広く、上部へ次第に狭くなり、鋭尖頭となる。葉の裏面は無毛で、しばしば主脈の下部にのみ疎らに毛があるだけである。脈上に殆ど刺は無い。小花梗は

ごく短い (Fig. 2, a)。これに対しタラノキは茎の刺が細くて長い (Fig. 3, a)。小葉は中ほどからやや下で幅が広く、急に上部へ狭くなり、鋭頭である。葉の裏面は一般に毛が密に生えるが、毛の無いものでも脈上に毛状の刺がある。小花梗は長く、花時 3–5 mm、果時に 4–6 mm である (Fig. 2, b)。リュウキュウタラノキはタラノキとも異なる種類として扱うのが妥当と思う。リュウキュウタラノキの変種と考えられるシチウトアラノキ (Fig. 2, a) の学名も変更を必要とする。

Aralia ryukyuensis (J. Wen) Yamazaki, stat. nov.

Aralia bipinnata auct. non Blanco: Walker, Fl. Okinawa: 787 (1976).

Aralia elata (Miq.) Seem. var. *ryukyuensis* J. Wen in Novon 4: 402 (1994).

Distr. The Ryukyus and NW Taiwan.

var. *inermis* (Yanagita) Yamazaki, comb. nov.

Aralia hypoleuca Presl. var. *inermis* Yanagita in J. Jap. Forest. Soc. 19: 340 (1937).

Aralia bipinnata Blanco var. *inermis* (Yanag.) Yamazaki in J. Jpn. Bot. 62: 190 (1987).

Aralia elata (Miq.) Seem. var. *inermis* (Yanag.) J. Wen in Novon 4: 402 (1994).

Distr. Pref. Tokyo, Izu Isls.

(東京大学理学部附属植物園)

Hideaki OHBA^a and U Myint SWE^b: On the Flora of Mount Popa, Central Myanmar (Burma) with Additional Species

ミャンマー中部ポパ山植物相の一瞥 (大場秀章, ウミン スウェ)

Floristic interaction between Himalaya and Malesia is almost unsolved. Northern Burma is the botanical boundary between Himalaya and Hengdowan mountains. To solve the floristic relations between Himalaya and Malesia, floras of central and southern Burma are significant. The first author, discussed the Sedoideae (Crassulaceae) flora of Burma especially of Mt. Victoria (Ohba 1975, 1981) and also described a new species of *Potentilla* from the mountain (Ikeda and Ohba 1995).

Recently we have had an opportunity to visit

Mt. Popa National Park and observed the vegetation and flora. Mount Popa, located ca 50 km SE of Bagan (Pagan), an ancient capital of Burma (25° 56' N and 95° 16' E), is an extinct volcano attaining ca 1500 m in elevation. The mountain is easily recognizable from remote places, because it independently stands up from dry central plain east of Irrawaddy River.

Mount Popa National Park was established in 1982 for conservation of diverse vegetations and wild life. During and after the World War II, over